

『パンセ』断章「気晴し」のタイトルについて

湊野正満

要旨

『パンセ』断章「気晴し」には、パスカル自筆の草稿が残っている。これは5枚の紙に書かれていて、そこには、テキストの3つの層が重層的に存在していることが近年の筆者の研究でわかってきた。筆者はこの3つの層を順次調べて、3つの層に第1文書、第2文書、第3文書の3つテキストを洗い出してきた。この3つの文書は、順次発展的に次の文書に仕立てなおされていき、それぞれ異なる目的を持っている。

小論では、主にこのタイトルの変遷に焦点を絞って論じる。

第1文書において、パスカルは自分の考えていた問題が解けて、それを喜びとともに文章にしたためている。これは自分のための覚え書きと言った性質の文書で、無題であったと思われる。

ある時、この文書を自分の企画している『キリスト教弁証論』に転用しようと思い、第1文書のなかにみられる自己愛的表現に満ちている部分を書き直し、思想的にさらに発展させて第2文書を作り上げ、『キリスト教弁証論』の第3章「人間の悲惨」に組み込んだ。このとき第2文書に「人間の悲惨」というタイトルをつける。第2文書は思想的に豊かな内容を持ち、「気晴し」と「倦怠」、さらに「人々の健全な意見」などの思想を生み出し、第3章「人間の悲惨」のあとに、第4章「倦怠」、そして「人々の健全な意見」の章を生み出すが、「倦怠」の章には短い3つの断章、「人々の健全な意見」の章には一つも断章が分類されず、現在は2写本準拠の『パンセ』には、この章は立てられていない。

この第2文書はさらに加筆を加えられ、第3文書へと発展的に進化するが、その内容はすでに『キリスト教弁証論』第3章の枠組みを大きく超えてしまう。そこでパスカルはこの文書とその周辺文書を独立させて新たな章を誕生させ、第8章として「気晴し」の章を作り、第3文書のタイトルも「気晴し」と改めた。

キーワード：パスカルの『パンセ』：*Pensées de Pascal*、断章「気晴し」：«Divertissement»、目次の成立過程：morphogenesis of contents、表題の変遷：changes of titles、自筆の草稿：autograph manuscript

I 序章

1 草稿調査から浮かび上がってくるもの

現在、筆者はパスカル『パンセ』草稿から、断章「気晴し」の草稿の研究を進めているが、この研究が進み生成過程が明らかになってくるにつれて、断章「気晴し」の草稿の構造は、これまで筆者が研究してきた大きな断章「賭」、 「想像力」などの草稿にくらべて、はるかに複雑であることがわかってきた。

これを図にして示すとおおむね次のようになる。

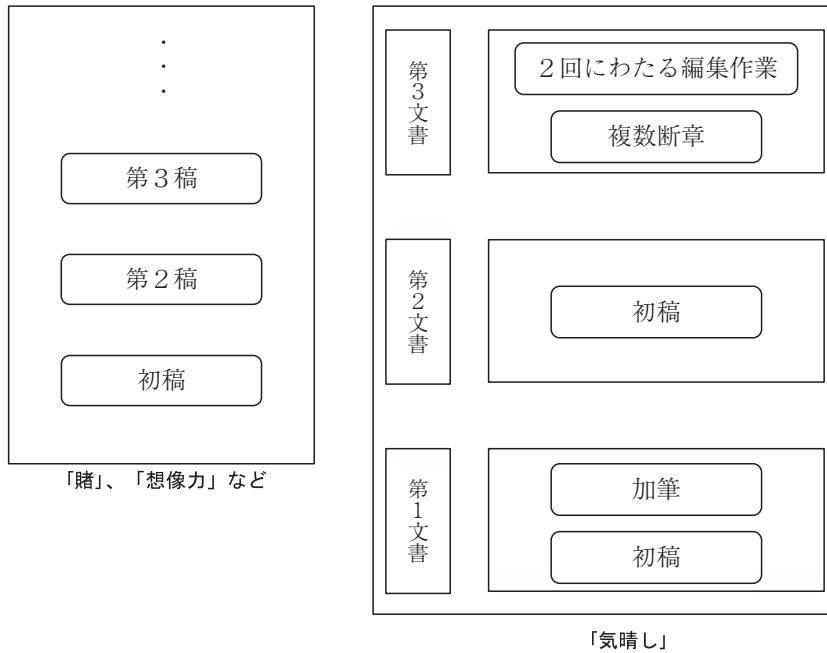


図 1

大規模修正のみられる「賭」，「想像力」などの草稿では，もともと執筆し始めた文書が，修正を通じてより深い思想に発展していく，言い換えると初稿，第2稿，第3稿と稿を重ねるうちにより深化していくと言う生成の過程を取ってきたのであるが，「気晴し」の草稿では，始めに書かれた文書に加筆の後が見られ，その後その文書は大幅に書き換えられて別の目的に転用され，さらに，この文書を再度別の文書に転用するために大幅な加筆訂正がなされ，編集作業が加えられている。いわば，断章「気晴し」の草稿には，3つの文書の層が見られるのである。

そこで，これまでのように初稿，第2稿…とせず，図1右欄の「気晴し」のように，第1文書，第2文書，第3文書と命名する。小論でもその一部を説明するように，各文書の性格・目的が大幅に変化して，同じ文章の進化形と言ってしまうことが不適切であること，また，特に第1文書への加筆修正，第3文書への多くの加筆修正があるので，それらを稿という概念だけでは全体像をとらえきれなくなったことが理由である。

すでに筆者は「気晴し」の草稿に三重のテキストの層が存在することに気づき，拙論「パスカルの『パンセ』草稿第209ページ，210ページにみられるテキストの加筆・訂正について」（京都産業大学論集，人文科学系列，2009，40，p.p.195-222.）とその議論を補う「パスカルの『パンセ』草稿第209ページに見られるCarの放棄について」（京都産業大学論集，人文科学系列，2013，46，p.p.299-313）の2論文において，その第一の層に存在する初稿（第1文書の初稿）の

存在を指摘した。

また、拙論「パスカルの『パンセ』草稿第209ページ、217ページにみられるテキストの加筆・訂正について（京都産業大学論集．人文科学系列，2010，41，p.p.144-180.）」において，第二の層に存在する第2文書の存在を指摘した。

これまで『パンセ』刊本には，断章「気晴し」の文章が収録されている。これらは，編者たちが成立の事情を理解せずには校訂しているのでテキストの順序や放棄されたテキストを混入させていたり，またパスカルが欄外の余白に書き込んだメモを本文中に挿入したりと混乱している。5枚の用紙上にあるテキストについて，パスカル自身，第1文書，第2文書の保存を企てていたわけではなく，さらに最終的な「気晴し」の文章の完成にはほど遠い。しかしパスカルが「気晴し」について一つの文書に練り上げていこうとしていたのはまちがいない。この未完の文章は，パスカルが第3文書として加筆修正と2度の編集作業（パスカルが断章「気晴し」に加えた最後の作業）を施した文書なので，従来の『パンセ』中にみられる断章「気晴し」の文章は，結果的に最終状態の第3文書とおなじもののはずである。近々第3文書の成立過程についても議論するつもりで準備している。小論中において，第3文書まで扱うが，準備中の論文が未完であることは，小論の議論を妨げないことをここに付け加えておこう。

さて，以上述べた第1文書から第3文書について，第1文書は無題のものであり，第2文書のタイトルは«Misère de l'homme»، 第3文書のタイトルは«Divertissement»であると，筆者は断章「気晴し」に関する3つの論文の中で判定してきたが，その根拠を明らかにしていくことが小論の目的である。

2 タイトル

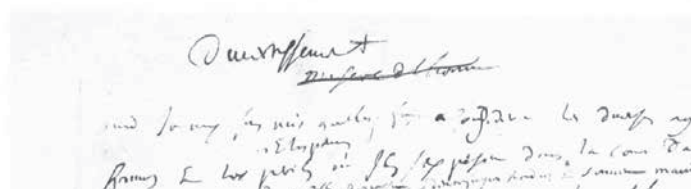


図2 R.O. p.139 最上部

図2を見てほしい。断章「気晴し」の最初のページ最上部である。成立の複雑な事情を知らなくても，ここにタイトルの修正があることは明らかである。すなわち«Misère de l'homme»と書かれ，横線で放棄されている。そして，その左上に«Divertissement^t»と修正されている。しかしそれだけであろうか。よく見てほしい。「Divertissement^t」の最後に+記号が付けられていることに気がつかないであろうか。タイトル部分のみを活字転写すると次のようになる。

+

Diuertissem^t

Misere de l'homme

図3 R.O. p.139 最上部, 活字転写 (タイトル部分のみ)

これら3つが書かれていった順序を考えてみよう。+記号はパスカルが新しい紙に文章を書くときに、最上部に書き込む記号である。であるとするなら、これが一番最初であると考えてよいだろう。次にセンターにあり、かつ横線で放棄されている「Misere de l'homme」、それを放棄して修正した「Diuertissem^t」は最後に書かれたと考えられよう。このことをわれわれの草稿解釈にあてはめて考えると、まずはじめにパスカルは+記号を付けて文章を書き始めた。これは第1文書の初稿にあたる。

ところで、パスカルは+記号を付けたあと、「Misere de l'homme」というタイトルを書いたのではないだろうかという疑念が生ずるかもしれない。確かに図2を見ると、+記号と本文第1行目のあいだに「Misere de l'homme」と書かれている。もし、「Misere de l'homme」を加筆だとすると、+記号と本文第1行目の間が空き過ぎているという反論もあるだろう。そうであるならば、この文章ははじめから、「Misere de l'homme」というタイトルを持っていたことになる。しかし『パンセ』草稿集には、つぎのような+記号と本文第1行目の間に広いスペースのある例をいくつも見ることができる。

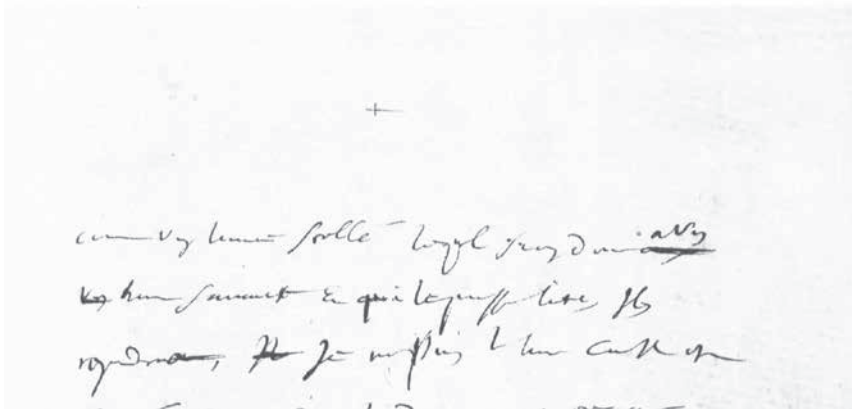


図4 R.O. p.173 最上部

この例では+記号と本文第1行目の間にかなりのスペースを開けている。このほかにも、広いスペースのあるケースは少なくない (pp.175, 177, 179, 185, 187, 189, 239 など)。

なお、+記号について、補足しておく、パスカルは新しい紙に文章を書き始める時に+記号を紙の最上部につけているが、その意味や用途は類推の域を出ない。また、『パンセ』草

稿集には大きな紙片でも、+記号の付けられていないものもあるが、これはアルバム作成時に切り落とされた可能性もあるので安易なことは言えない。

さて当面の問題に結論を出していいであろう。すなわち、図2から、この文章は第1文書作成の時点から、「Misère de l'homme」というタイトルを持っていたという結論を引き出すことには慎重になるべきである。

次に、第3文書の少なくとも最終の段階の文書についてはどうであろうか。この文書こそ、『パンセ』の諸版に印刷され、一般にわれわれが目にする断章「気晴し」であるが、第3文書の最終段階が「Divertissement」というタイトルを持っていたことに反対するものはない。草稿からも明らかであるばかりか、この草稿とはじめて向き合った第1、2写本の作成者をはじめFaugère, Havet, Molinier, Michaut, Brunschvicgなどの19世紀の近代版から最新のSellier版に至るまで、多くの版本でこれをタイトルと認めている。

それでは、「Misère de l'homme」なるタイトルはいかなる段階で導入されたのか、また、「Divertissement」というタイトルは、第3文書の最終段階においてその文書に付与されていたことはあきらかであるが、どの時点から導入されるのか、こういった問題に光を当てる余地はあるのか、その辺りの議論を一度整理して論じてみたい。

II 第1文書

1 構成

第1文書は大きく3つの構成からなっている。

- 1) イントロ
- 2) 命題の提示と例証
- 3) 自説の優位性の主張

パスカルはことの始まりをこう書き記す。

«Quand je m'y suis mis quelquefois à considérer les diverses agitations des hommes, et les périls où ils s'exposent, dans la cour, dans la guerre⁽¹⁾, j'ai dit souvent que tout le malheur des hommes vient de ne savoir pas vivre en repos dans une chambre⁽²⁾»¹⁾

(下線と番号は筆者)。

すなわち彼は騒ぎを求める人間の愚かとも思える行動(下線部(1))を指摘して、その原因(下線部(2))を指摘する。しかしさらによく考えてその原因の理由を見つけたいと望んでいたなら、これを発見した(«j'ai trouvé qu'il y en a une effective»)という。

それではパスカルはどのようなことを発見したのであろうか。次のようにパスカルは定式化

する。

L'unique bien des hommes consiste donc à être divertis de penser à leur condition ou par une occupation qui les en détourne, ou par quelque passion agréable et nouvelle qui les occupe, ou par le jeu, la chasse, quelque spectacle attachant, et enfin par ce qu'on appelle divertissement.» (Texte 5²⁾)

要職などの忙しい仕事、命がけである軍職、海外に富を求めていく航海、賭け事、狩り、女性との会話など、要は「気晴し」と呼ばれている種々のことに夢中になることによって自分のおかれている死すべき宿命を考えないようにすることによってしか、人々は幸福になれないというが、これが人々が幸福になるために創意工夫することが出来たすべてであるとパスカルは言う「Voilà tout ce que les hommes ont pu inventer pour se rendre heureux」。

この人々の創意工夫にたいして哲学者ぶったひとたちは、「買ったのなら欲しくもない野うさぎを追っかけて一日中過ごすなんて不合理だ」と非難するが、そう言った輩は人間の本性を理解していないのだとパスカルは言う。その理由は、その野うさぎは、死や悲惨を目の当たりから人間を守ってくれないが、狩りは守ってくれるからだと言う。このことをピリュス王とキネアスのエピソードで補強した後、次のように言う。

Texte 14 (premier jet, テキストはパスカルの草稿に基づき筆者による)

Ainsi on se prend mal pour les blâmer; leur faute n'est pas en ce qu'ils cherchent le tumulte, s'ils ne le cherchaient que comme un divertissement; mais le mal est qu'ils le recherchent comme si la possession des choses qu'ils recherchent les devait rendre véritablement heureux, et c'est en quoi on a raison d'accuser leur recherche de vanité: de sorte qu'en tout cela et ceux qui blâment et ceux qui sont blâmés n'entendent la véritable nature de l'homme. (下線筆者)

非難される人々もこれを非難する哲学者ぶったひとたちも両方とも真の人間性をわかっていないと結ぶ。裏返すと自分のみが理解しているというパスカルの主張に読める。

2 パスカルの自己批判

ところで、ピリュスとキネアスのエピソードの後半から texte 14 が書かれている草稿 209 ページの左欄外上部をみると「La Vanité; le plaisir de la montrer aux autres」と記されている。これは『パンセ』本文と解釈され、断章「気晴し」の本文中に組み込まれたりしている (BRU, LAF など)。

だが、そうであろうか。パスカルはことさら文章のつながりには敏感な人である。もし本文に組み込むべきものであれば、パスカルは通常、挿入記号、送り記号を付け明示する。それではなぜここにこの文を書き付けたのか。単に思いついたアイデアを書き付けただけであろうか。

筆者はその立場は取らない。先ほど論じたように Texte 14 こそは、人々も哲学者たちも人間の真の本性を理解していないこと、もう一度繰り返すことになるが、裏返すと自分のみが人間の真の本性を理解しているというパスカルの強い自己主張を読み取ることが出来る。『パンセ』中に «Le moi est haïssable» (fr.494) と記し、実人生では自分の自尊心が頭を持ち上げたときには、胴の周りに巻いていた鉄製の鎖（周辺には刺を付けてあった）を肘で打って自分を戒めていたパスカル（そこまですないとあふれる自尊心を押さえることが出来なかった）が、文章を読み返したとき、このことを感じないわけではない。そこで Texte 13-14 の欄外の «La Vanité; le plaisir de la montrer aux autres» は、自分の書いたテキストを批判するメモを書き残したものであると筆者は解釈する。このメモこそ、のちに、第2文書作成の際に、パスカルが Texte 10-14 を一気に放棄して全面改稿する理由であろう。

この文章中において «quand j'ai pensé de plus près et qu'après avoir trouvé la cause de tous nos malheurs j'ai voulu en découvrir la raison, j'ai trouvé qu'il y en a une bien effective» と書き付けた作者は、ここにおいて自分に課した課題の現象について、それまで気がついていなかった現象の理由 («Raison des effects») を発見した喜びに満たされている。これこそがパスカルがこの第1文書を書いた動機であると筆者は考える。おのれの感情を表出しているという意味で、この文書には、彼自身の自我が顔を現している³⁾。『パンセ』中に «Le moi est haïssable.» (fr.494⁴⁾) と書き記し、個人的な感情をそのまま文章中に表現することを避けた古典主義文学の時代に属するパスカルのことを考えると、このようなことはめづらしい。この文書は人に読ませるためのものではなく、パスカルが自分自身のため、メモとして書き取ったものと思われる。

3 タイトルなしの第1文書

第1文書は、3枚の紙 (R.O. p.139, 210, 209) の上に記載されているが、Pol Ernst の研究 (*Les Pensées de Pascal, Géologie et stratigraphie*) によれば、この紙は、2種類のすかしを持っているという。そのうちの2枚 (R.O. p.210, 209) は、Philippe Sellier 氏によれば、1658年春にパスカルが購入したものと推定できるという。この時期はパスカルがすでに『キリスト教弁証論』の為に文章を書いている時期であり、同じく Sellier 氏の研究によれば、1658年6月には、『キリスト教弁証論』執筆のための試みとして、断章の分類を進め、2写本が伝えるような一応結論まである章立てをまとめあげている時期である。そして、パスカルは、その章立ての第3章には «Misère de l'homme» というタイトルを与えている。こういった時期に、ある文書に «Misère de l'homme» というタイトルを使用するということは、その文書は明らかに、企画中

の『キリスト教弁証論』を意識したもの、もう少し踏み込んで言えば、その章のために特化した文書であると言うべきであろう。

ところが、今問題にしている第1文書は、むしろプライベートなメモ書きと言った性格を強くもっている。その意味で、必ずしも「Misère de l'homme」というタイトルにふさわしい文書だとは言えないのではないか。筆者は、第1文書はタイトルをつけられていない文書だと見るのが妥当であると判断する。

Ⅲ 第2文書

1 第2文書の成立

第1文書から第2文書への移行のプロセスについては、すでに、2つの拙論「パスカルの『パンセ』草稿第209ページ、210ページに見られるテキストの修正・放棄について」、*「パスカルの『パンセ』草稿第209ページに見られる Car の放棄について」*において明らかにした。ただし、前者においては草稿の3層構造の解明が充分ではなかったので、前者を参照する場合には、本小論の記述で補って読んでいただきたい。

2つの拙論で明らかにしたことを要約すると、まず、第1文書の最後(自説の優位性の主張)の部分について、その理由を加えようと考え、「Car」(「なぜなら」)と書きだしたところで、自説の優位性について述べた文書を書き換えることを先にすべきだと考え直し、今書き始めた「Car」を含め、前ページのピリュスのエピソードの前までさかのぼり削除し、そこに送り出し記号Aを付け、受け取り記号Aを今削除した「Car」の行の頭に付けて、消された「Car」の後にそのまま続けてTexte 15へと書き直す。そしてこの書き直した文章に対して、先ほど書きかけた「Car」とそれに引き続く理由(Texte 16)を書き次ぐ。そしてその理由を書き終わると「気晴し」へとテーマを戻し、Texte 17と18を記す。そこで、おそらく体力を消耗したパスカルは、この文章の最後の部分を4枚目の紙に秘書に書き取らせる。断章「気晴し」の本体についてはそこで書き切るが、なお「気晴し」に関連する文章(Texte 25, 26)を追加して秘書に書き取らせ、執筆を終了する。

2 Texte 15への改稿の意味

Texte 15 (初稿)

Et ainsi, quand on leur reproche que ce qu'ils recherchent avec tant d'ardeur ne saurait les satisfaire, s'ils répondaient comme ils devraient le faire s'ils y pensaient bien, qu'ils ne recherchent en cela qu'une occupation violente et impétueuse qui les détourne de penser à soi et que c'est pour cela qu'ils se proposent un objet attirant qui les charme et les attire avec ardeur, ils laisseraient leurs adversaires sans répartie, mais en croyant

comme ils font qu'ils seront ensuite dans un heureux repos, ils donnent beau à se faire battre mais dans la vérité on ne combat que l'objet imaginé et non pas celui qu'ils ont en effet et qui se cache et se dérobe à leur vue dans le fond de leur coeur.

Texte 14において、「気晴し」を実践する人々、それを批判する哲学者ぶっているひと、そして「私」の3種類の登場人物がいて、人々も哲学者ぶっている人も人間の本性がわかっていない。わかっているのは「私」だけだといった趣で、自説の優位性を認めさせることに力が入った文章であったのに対し、Texte 15では「私」はむしろ舞台から姿を消し、いわば語り手として、表に出て来ることを避けている。第1文書の最後に自説の優位性を主張することにおいて強く感じられた作者の独善的態度がほとんど感じられないほど薄まっている⁵⁾。

パスカルが第1文書の最後（自説の優位性の主張）の部分进行全面改稿して、前面に顔を出していた自分の姿を消し、語り手に徹するように文章を改めることから始めたということは、パスカルが個人的なメモ書きである第1文書をプライベートな文章としてではなく他人に読ませるものに仕立て直していることを意味している。言い換えると、この文章を企画中の『キリスト教弁証論』に転用して、そのプランのなかに組み込もうと考えていたことを示している。すなわち、このTexte 15の成立をもって、いいかえると、第1文書を転用して第2文書に仕立て直す時点で、「気晴し」の思想が企画中の『キリスト教弁証論』に導入されたことになるかと筆者は考える。

3 Texte 16の初稿と加筆

さらに、ここではTexte 16の初稿と加筆について論じていこう。

Texte 16（初稿）

Car, ils ont un instinct secret qui les porte à chercher le divertissement et l'occupation au-dehors, qui vient du ressentiment de leurs misères continuelles et ils ont un autre instinct secret qui leur fait connaître que le bonheur n'est que dans le repos et non pas dans le tumulte. Et de ces deux instincts contraires, ils se forme en eux un projet confus qui les porte à tendre au repos par l'agitation et à se figurer toujours que la satisfaction qu'ils n'ont point, leur arrivera, si, après avoir surmonté quelques difficultés qu'ils envisagent, ils peuvent s'ouvrir par là la porte au repos. (下線筆者)

Texte 16（加筆後）

Ils ont un instinct secret qui les porte à chercher le divertissement et l'occupation au-dehors, qui vient du ressentiment de leurs misères continuelles. Et ils ont un autre

instinct secret *qui reste de la grandeur de notre première nature*, qui leur fait connaître que le bonheur n'est *en effet* que dans le repos et non pas dans le tumulte. Et de ces deux instincts contraires il se forme en eux un projet confus *qui se cache à leur vue dans le fond de leur âme*, qui les porte à tendre au repos par l'agitation et à se figurer toujours que la satisfaction qu'ils n'ont point leur arrivera si, *en surmontant* quelques difficultés qu'ils envisagent, ils peuvent s'ouvrir par là la porte au repos.

(下線, イタリック筆者)

Texte 16 の初稿について拙論「パスカルの『パンセ』草稿第 209 ページに見られる Car の放棄について」において次のように論じた。

Texte 16 に至って、この文章の様相は一変するのである。第 1 文書が、騒ぎを求めることによって安息に向かおうとする人間の矛盾した行動を、あくまで人間的事象の中で説明しようとしていたのに、第 2 文書では、Texte 15 で展開した人間の矛盾した行為を、現在の人間の本能と原罪以前の人間の本性という 2 つの矛盾した原理によって説明し、キリスト教的観点が導入されているのである。(p.306)

Texte 16 (加筆後) を見てみると、そこには明示的に「原罪以前の人間の本性」(«un autre instinct secret *qui reste de la grandeur de notre première nature*, qui leur fait connaître que le bonheur n'est *en effet* que dans le repos et non pas dans le tumulte») に言及されている。この初稿と加筆後のテキストを比較し、草稿の修正跡を検討することによってさらに興味深いことがわかってくる。そこで草稿のこの部分をわかりやすいように活字転写して検討してみよう。

- L1 { car } Jls ont Vn Jn instinct secret qui les porte a Chercher le diuertissem^t.
- L2 Et l occupation au dehors, [Et comme s Jls ont] qui uient du ressentim^t de leurs
grandeur de nostre premiere
^ { de la nature corrompue } [que] qui reste de la ^ nature { saine }
- L3 miser^s continuelles ^ Et Jls ont Vn autre Jn instinct secret qui leur fait
^ en effect
- L4 connoistre que le bonheur n est ^ que dans le repos Et non pas dans
- L5 [la recherche] le tumulte, Et de ces deux Jn instincts contraires Jls se
qui se cache a leur ueue dans le fond de leur ame
- L6 forme en eux (le)Vn [r] projet confus ^ qui les porte a tendre au repos
- L7 par l agitation, Et a se figurer toujours que la satisfaction qu Jls
en
- L8 n ont point leur arriuera si { apres auoir } surmont(é)ant quelques difficultez
- L9 qu Jls (s)Enuisagent Jls peuuent s ouvrir par la la porte au repos.

図 5 (R.O. p.209 より Texte 16)

図5の活字転写において、2行目と3行目の間隔が広がっているが、それは、*l.2*と*l.3*の行間に2行加筆があるため、活字転写する際に図のようにせざるを得なかったが、実際の草稿上では、*l.1, l.2, …l.9*までほぼ等間隔である。

さてその*l.2*と*l.3*の間の加筆に注目してみよう。

初稿では「Car, ils ont un instinct secret qui les porte à chercher le divertissement et l'occupation au-dehors, qui vient du ressentiment de leurs misères continuelles et ils ont un autre instinct secret qui leur fait connaître que le bonheur n'est que dans le repos et non pas dans le tumulte.」と書いていたパスカルは、加筆の際に、まず、一つ目の秘められた本能にその由来を明らかにすることにして、アダムの墮罪（«de la nature corrompue»）に言及、さらに2つ目の秘められた本能にもその由来を説明して原罪以前の人間の本性（«qui reste de la nature saine»）に言及する。

その次には、両方書く必要性を認めず、アダムの墮罪（«de la nature corrompue»）の方は放棄し、かわりに«la nature saine»をパラフレーズしている。すなわち、«saine»を横線で消してそのかわり«grandeur de notre première»を追加し、結果として第二の本能についてのみ«un autre instinct secret qui reste de la grandeur de notre première nature»と修正されたことになる。

このようなプロセスを理解した上で、もう一度、この部分の初稿を読みなおしてみよう。

第1の本能についてパスカルは«un instinct secret qui les porte à chercher le divertissement et l'occupation au-dehors, qui vient du ressentiment de leurs misères continuelles»と記している。ここにはアダムの墮罪に触れるようなことは記述が無い。第2の本能についても«un autre instinct secret qui leur fait connaître que le bonheur n'est que dans le repos et non pas dans le tumulte»と、原罪以前の人間の本性を思わせる言葉は明示的には存在しない。

Texte 16の初稿と加筆後のテキストの差は何を意味しているのであろうか。初稿を書いたときには、アダムの墮罪や原罪以前の人間の本性による説明を思いつかなかったのであろうか。否、初稿はあきらかに背後にこの思想が無ければ書けないものである。それどころか、この思想は第1文書を書き記した時から、パスカルの頭に浮かんでいたものと思われる⁶⁾。ということは、あえてそれに言及するのを避けたことを意味している。なぜであろう。Texte 16の初稿が書かれたときと加筆が行われたときでは、この文書全体がおかれている状況が異なっていることを示してはいないであろうか。

というのも、私見によれば、第2文書は元々«Misère de l'homme»というタイトルを冠せられて、パスカルの企画していた『キリスト教弁証論』の同名の第3章に組み込まれるべく仕立てなおされているものである。そして、この文書は最終的には、«Divertissement»とタイトルも変更されて第3文書として、あらたに第8章を誕生させるきっかけになるのである。

ところで、第3章«Misère de l'homme»は、もともと『キリスト教弁証論』の第1部準備段

階 «la partie préparatoire, ou philosophique, de l'*Apologie*, celle qui a pour sujet l'homme» (Jean Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, p.178, S.E.D.E.S. 1976) の入り口であって、聖書に触れた記述⁷⁾が1つあるにはあるが、むしろ宗教色をまったくといってよいほど持たない。ところが、第8, 9, 10章は第11章から始まる第2部 «la partie démonstrative, ou théologique» (ibid., p.178) への橋渡しの部分であり、キリスト教を知る必要性を説得する役割を担っている。

さて、Texte 16の初稿と加筆後のテキストの違いについて筆者は次のように考える。

初稿はあきらかに宗教的説明原理をあえて持ち込まずに第3章 «Misère de l'homme» の枠内にとどまったものである。第1文書が『キリスト教弁証論』のために書かれたのではなく、自らの物覚えとして記されたものであることを考え合わせると、パスカルが第2文書作成の時点ではじめてこの文書を『キリスト教弁証論』のプログラムに取り込み、第3章 «Misère de l'homme» へ編入したことが明らかであろう。

他方、加筆後のテキストは、騒ぎを求めることによって安息に到達すると言う矛盾した人間の行動をアダムの墮罪というキリスト教的原理によって説明している。この説明は『キリスト教弁証論』の第3章 «Misère de l'homme» のプログラムからは大きく逸脱することになり、むしろ第8章 «Divertissement» の枠組みを前提にしなければ成り立たない。したがって、パスカルによってこの加筆がなされたのは、第3文書として、«Divertissement」という新たな章が成立してから、ないしは、新たな章の成立を前提としてなされたものと言ってよいであろう。第8章には本断章を含め8つのものしか分類されていないことを見れば、第3文書の成立こそが、あたらしい第8章の誕生を促したと考えてよいであろう。

4 「倦怠」の導入

第2文書では、「倦怠」 («l'ennui») の思想もあらたに導入されている。テキストの変遷については拙論「パスカルの『パンセ』草稿第209ページ、217ページにみられるテキストの加筆・訂正について」において詳述したので、そちらを見ていただきたい。ここでは、我々のテーマに関する指摘のみにとどめる。そこで、第2文書において成立したTexte 17を見てみよう。このテキストにおいて、パスカルははじめて「倦怠」に言及する。そしてその後「倦怠」と「気晴し」の関係について、思索をめぐらす。

Texte 17 (初稿)

Ainsi s'écoule toute la vie, on cherche le repos en combattant quelques obstacles. Et si on les a surmontés, le repos devient insupportable par l'ennui qu'il engendre. Il en faut sortir et mendier le tumulte. (下線と強調は筆者)

「倦怠」とは、第1文書には登場してこない思想である。この新しい登場者は、「気晴し」を

説明するのに重要な思想である。第1文書においては、人は「休息」していると、自然と人間の死すべき宿命のことを考えるということが論を動かす原動力であった。第2文書で成立する Texte 17 において、パスカルははじめて、「休息」は「休息」が人の心に産みつける「倦怠」によって堪え難いものになるという原理を『キリスト教弁証論』に導入する。

この思想の導入と第4章のタイトルは密接な関係があると思われる。というのも、『パンセ』第1、第2写本に添えられている目次の第4章は「倦怠、すなわち人間の本質（的特性）」(ENNUI ET QUALITÉS ESSENTIELLES À L'HOMME) と名付けられ、そこには短い3つの断章⁸⁾のみが分類されている。

ここで、一度両写本に付けられた目次⁹⁾の第1列を見てみよう。

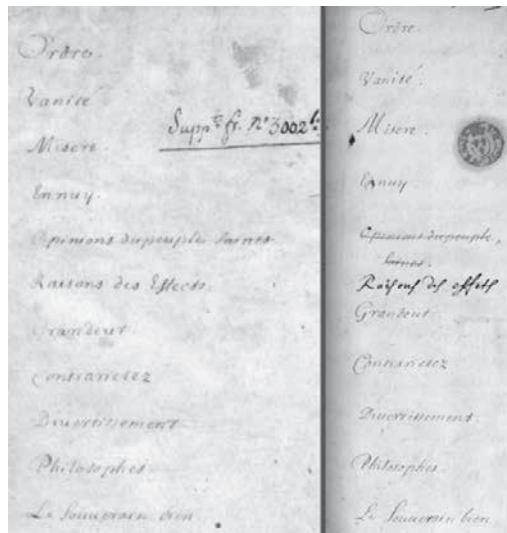


図6 左:第1写本目次(部分) 右:第2写本目次(部分)

図6の表の順にタイトルを書き写す。「Ordre」、「Vanité」、「Misère」、「Ennui」、「Opinions du peuple saines」、「Raisons des effets」、「Grandeur」、「Contrariétés」、「Divertissement」、「Philosophes」、「Le souverain bien」第2文書は上の表の第3番目「Misère」に分類されていたが、第3文書にいたって、そのプログラムの枠には収まり切らなくなり、あらたに「Divertissement」の章を作ったと筆者は解釈している。断章「気晴し」は「倦怠」の思想と密接に関わっており、他にも「倦怠」に触れた短い断章があるにはあるが、断章「気晴し」においてほど詳しく述べられているものはない。しかも、この思想は特に第2文書で大きく発展した思想である。この第2文書が「Misère」の章に置かれていたときに、パスカルは「Ennui」の章を作ったのではないか、ところが、ほどなく、第3文書が成立し、パスカルが第8番目に「Divertissement」の章として断章「気晴し」とそれに関連する文書をそっくり移動させてし

まったために、「Ennui」の章が未発達の状態で置かれていたのではないかと考えている。

この目次について、もう一つ仮説を述べたい。両写本において横線で消されている項目すなわち「Opinions du peuple saines」についてである。『パンセ』中このテーマは「Raisons des effets」のなかにいくつか見られる。

まず引用したいのは、セリエ版『パンセ』断章 134 からである。

Le peuple a les opinions très saines. Par exemple :

1. D'avoir choisi le divertissement, et la chasse plutôt que la prise. Les demi-savants s'en moquent et triomphent à montrer là-dessus la folie du monde. Mais par une raison qu'ils ne pénètrent pas on a raison.

これはまさに「気晴し」の断章中 Texte 11 とパスカルが展開し Texte 16 でも触れた議論である¹⁰⁾。

次はセリエ版『パンセ』断章 126。

Il est donc vrai de dire que tout le monde est dans l'illusion, car encore que les opinions du peuple soient saines, elles ne le sont pas dans sa tête. Car il pense que la vérité est où elle n'est pas. La vérité est bien dans leurs opinions, mais non pas au point où ils se figurent.

この議論は Texte 14 と 15 のなかで展開された議論である。

「Opinions du peuple saines」の章は、両写本に付けられた目次にも記載はされているものの、横線で消されており、実際にはその章に分類されている断章も存在しない。しかし、上に引用したわずかな手がかりからも、断章「気晴し」の5枚の紙面に存在する第2文書と強いかわりのある項目であると考えられる。これは、第2文書の成立時に、「Ennui」とともに一つの章としてパスカルがたてたものではなかろうか。そして、おそらくは、表題を記載したラベルのみが存在し、「Ennui」の束の次に置かれていたのではないだろうか。そして、両写本に付けられた目次を作成したコピストは、この章には、分類されている紙片が無かったので、それを横線で消すことで表現したのではないだろうか。

いづれにしても、「Ennui」、「Opinions du peuple saines」の章の位置とこれらの章の現状¹¹⁾は、第2文書が「Misère」の章に所属していたことを明かしてくれる強力な状況証拠と筆者は考える。

IV 第3文書

第2文書から第3文書への移行のプロセスについては、現在準備中の論文で述べることになるが、調査は終了し、プロセスの解明も完了している。また、第3文書の最終のステップは、これまで編纂されているテキストと基本的には同じものであるはず¹²⁾なので、調査結果を先取りして、必要な点に絞って述べていこう。

第3文書の成立のプロセスの概略を述べておこう。第1文書が2枚半の紙に記されていたのに対し、第2文書については、パスカルは3枚目の残り半分と4枚目を使ってテキストを追加していった。第3文書はその初稿では、1から4枚目に加えて5枚目の紙を追加して、全部で5枚の紙を占める大きな文書群に成長した。ここには大きな第3文書初稿と断章「気晴し」に関する複数の比較的身近な考察が見られる。第3文書の初稿は2度の編集作業を経て、今日の断章「気晴し」のかたちになる。第3文書で書き足される内容はほとんどが「気晴し」に関するものである。第2文書には加筆のプロセスは見られず、第2文書で«Misère de l'homme»というタイトルを付与されている。このことから考えてこの文書のタイトルを«Divertissement»と変更したのは第3文書の歩む3つのステップのいずれかの段階である。

筆者は第3文書作成のプロセスの中で、1回目の編集作業に登場し、2回目の編集作業で消滅するキーワードに注目したい。第4枚目の紙の下側から第5枚目の紙の最上部へと続くテキストである。

Le diuertir --- {C} {D ou vient} que cet homme qui a perdu son fils unique depuis peu de mois, Et qui est[oit dans] accablé de procez [Et] de querelles Et de tant d affaires Importantes qui le rendoyent tantost si chagrin n y pense plus a present, ne Vous en estonnez pas, Jl est tout occupé a sauoir par ou passera ce sanglier que ses chiens poursuient C

図7 R.O. p.217 最下部 (加筆)

(C) poursuient. Jl n en faut pas dauantage p^r Chasser tant de pensees [de] tristes
+
Voila l esprit de ce maistre du monde tout remply de ce seul soucy

図8 R.O. p.133 最上部 (加筆)

(le divertir) D'où vient que cet homme qui a perdu son fils unique depuis peu de mois et qui est accablé de procès et de querelles et de tant d'affaires importantes qui le rendaient tantôt si chagrin, n'y pense plus à présent. Ne vous en étonnez pas; il est tout

occupé à savoir par où passera ce sanglier que ses chiens poursuivent. Il n'en faut pas davantage pour chasser tant de pensées tristes. Voilà l'esprit de ce maître du monde tout rempli de ce seul souci.

ここで、パスカルは突然これまで断章「気晴し」で使ってこなかった概念を登場させる。「ce maître du monde」はもっぱら人々の気を晴らすことにのみ専念するという。人々は「気晴し」のおかげで真の幸福には到達できないことになる。

これは、すぐにもう一つの登場人物 «cette maîtresse du monde» を思い出させるのではなからうか。これが指し示すのは「想像力」(『パンセ』断章78)であり、われわれを誤りと偽りに導く女主人 («cette maîtresse d'erreur et de fausset») である。最終的には、この言葉が記されている文章は、パスカル自身によって削除されている。しかし、断章「想像力」の4ページ目最下部左余白には «Il faut commencer par là le chapitre des puissances trompeuses» と記され、『キリスト教弁証論』の別のプランの可能性をも含むメモが残されている。ここでいう «les puissances trompeuses» (「われわれを欺く力」) の一つは「想像力」であることは言うまでもないが、断章「想像力」中には、他に «les impressions anciennes», «les charmes de la nouveauté», «fausse impression soit de l'instruction soit des sens», «maladie», «notre propre intérêt» などがあげられている。われわれを真理から引き離す主として «ce maître du monde» を、われわれを幸福から引き離す主として «cette maîtresse du monde» を、2つで一対の主として想定すると、それはちょうど2つの写本の章立ての «Vanité» と «Misère» を象徴する対比となるのではないか。そういうアイデアをここに見ることが出来るのではないか。そうであるとするならば、第3文書の第一回目の編集作業の結果付け加えられた «ce maître du monde» は、この段階では、第3文書がいまだ «Misère» の章の枠内にとどまっていることを示している。「Divertissement」の章が誕生するのは、第3文書の最終段階すなわち第3文書の第2回目の編集作業において «ce maître du monde» を含む第一回目の編集内容を破棄し、あらたなる枠組みを策定したときであると言えるのではないだろうか。

V 結論

断章「気晴し」の草稿上にはテキストの3つの層があって、それぞれの層に独立した文書が存在し、第1文書には初稿と加筆が、第3文書には2回の編集作業が加えられている。すなわち、第1文書で2つのステップが、第2文書に1つ、第3文書には3つ、トータルで6つのステップが存在すると言う複雑な構造を示している。ところで、この草稿には放棄されたものを含めると、2つのタイトルが見られる。

第1文書では、人々は部屋で安息に暮らしていることができず、騒ぎを求めるといふ現象の

理由をパスカルは追求し解き明かす。そしてその指摘の優位性を高らかに宣言している。そこには勝ち誇ったパスカルの姿を垣間みることが出来る。パスカルは自身すぐれた才能の持ち主で、つい他人より秀でていたことを主張したくなり、晩年には、内側に鋏の打ってある鉄の胴巻きをしていて、自己愛が頭を持ち上げると肘でその上を打って、その気持ちを鎮めたというほどであったことを考えると、第1文書においては、自説の優位性をストレートに主張するパスカルの生身の姿を垣間みた気がするの筆者ばかりではないと信じる。第1文書は、自分だけの覚え書きとして綴られたものであって、他人に読まれてもよい性質の文章ではない。第1文書は3枚の紙に書かれているが、この紙の透かし¹³⁾から言って、1658年の春以降¹⁴⁾にかかれたことになる。セリエ氏によると1658年6月には『キリスト教弁証論』の実現のために、パスカルは大いに仕事をして、その成果が27の章に分類されたパンセ断章の束であると言う。「*Misère de l'homme*」は、この時期以前からパスカルの『キリスト教弁証論』の構想にあった概念であり、自分だけの覚え書きに気軽に付けるようなタイトルでは無いはずである。

第2文書の成立については、第1文書を自分の企画している『キリスト教弁証論』に転用しようと考え、第1文書のなかにみられる自己愛的表現に満ちている部分を書き直し、思想的にさらに発展させて第2文書を作り上げ、『キリスト教弁証論』の第3章に組み込み、この文書に「人間の悲惨」というタイトルをつけた。第2文書は思想的に豊かな内容を付与され、「気晴し」と「倦怠」、さらに「人々の健全な意見」などの思想の母体となり、『キリスト教弁証論』のプログラムとして、第3章「人間の悲惨」のあとに、第4章「倦怠」、そして「人々の健全な意見」の章を生み出すことになる。「倦怠」の章には短い3つの断章が分類されているのみであり、また「人々の健全な意見」の章には一つも断章が分類されず、現在は2写本準拠の『パンセ』には、この章は立てられていない。

第2文書で投入される4枚目の紙は上部3分の1ほどがすでに使用されていたことが、Pol Ernstの研究¹⁵⁾でわかっている。この紙は第2文書で追加されたテキストの半分ほどの分量が記されており、そのほとんどが秘書に書き取らせたものである。パスカルは身体が弱く、特にこの時期は秘書の手を借りているようだ。というのも、第1文書の最後も、秘書の筆跡である。第2文書で追加されたこの紙には、秘書が書き取った後に最下部にある程度余白が残っている。このことは、2つのことを物語っているように思われる。第1は、ここでもパスカルはこれからどの程度文章を書くのか、ほぼ正確に把握しているということである。第2は、そこまでしてでも、自分の考えていることをとりあえず文章にしておきたいと言うパスカルの執念である。後者は第1文書についても言えることである。

第3文書に移ろう。第2文書は非常に豊饒なテキストであり、それが故に『キリスト教弁証論』入り口の窮屈な枠組みには収まり切らなくなる。具体的には、入り口の枠組みでは、理性的可る枠から出ないことが求められているが、キリスト教的説明原理が必要となり、結局、第3文書の最後の改訂版において、パスカルはその枠を出ることを決心して、断章「気晴し」と

その周辺文書を独立させ、新たに第8章として「Divertissement」の章を作成する。第8章はその後の第9章「Philosophe」、第10章「Souverain Bien」とともに『キリスト教弁証論』第1部の最後を飾り、第2部「la partie démonstrative, ou théologique」へ向けての準備段階という位置、すなわちキリスト教を知る必要性を説得する役割をになわされている。その意味でも、第2部で成立したテキスト、あえてキリスト教的バックグラウンドに触れずにやり過ぎたテキストにも、アダムの墮罪とそれ以前の無垢な人間の本性を対比するキリスト教的説明原理を導入して、より深く、しかも理解しやすいテキストを提供している。

筆者はこの『キリスト教弁証論』のプログラムの変更（第3章にあった第2文書を第8章として再編すること）は、ひょっとすると、その後に位置する第9章「Philosophe」にも影響を与えたのではないかと密かに考えてはいるがその議論はまた別の機会にゆずりたい。しかしながら、第2文書、第3文書の誕生はパスカルの『キリスト教弁証論』のプランの前半に大きな変化をもたらしたものであることを確信している。

本研究は平成25-27年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金、基盤研究(C)、課題番号：25370386）による研究成果の一部である。

また、2013年11月15日リヨン第2大学にて開催のCentre International Blaise Pascal主催のセミナーにて「Divertissement」の成立過程を約2時間にわたって話した際、小論の内容をも話している。

注

- 1) 草稿 R.O. p.139「第1文書」初稿より。以下、断章断章「気晴し」から、引用のテキストはすべて草稿から直接筆者の確立したものより引用。それ以外の断章は特に断らない場合はすべて最新のセリエ版『パンセ』より引用。
- 2) Texte の番号は、これまで発表してきた断章「気晴し」に関する3つの論文と共通であり、3つの論文に添付した『パンセ』草稿の活字転写の図版を参照。
- 3) (表層の《私》と深層の《私》—パスカルにおけるレトリックのもう一つの意味 京都産業大学論集、外国語と外国文学系列13, 142-156, 1986)。
- 4) 注1参照
- 5) Texte 15の後半部(«ils laisseraient leurs adversaires sans repartie»以降)については、パスカルはその後3度にわたり加筆訂正し、徹底して改めている。ここでは、書き改められる後半部だけを取り上げて紹介しておこう。

Texte 15の後半部(第1回修正後)

ils laisseraient leurs adversaires sans repartie, mais ils croient en effet que ce qu'ils cherchent est capable de les satisfaire et donnent beau à se faire battre mais dans la vérité on ne combat que l'objet qu'ils s'imaginent et non pas celui qu'ils ont en effet et qui se cache et se dérobe à leur vue dans le fond de leur coeur. (下線筆者)

1つ目は、初稿の«en croyant comme ils font qu'ils seront ensuite dans un heureux repos, ils»を«ils croient en effet que ce qu'ils cherchent est capable de les satisfaire et»へと2つ目は«l'objet

imaginé» を «l'objet qu'ils s'imaginent» へと書き換えた。

Texte 15 の後半部（第2回修正後）

ils laisseraient leurs adversaires sans repartie, mais ils ne répondent pas cela, parce qu'ils se sont trompés eux-mêmes et qu'ils ont d'autres pensées. Ils croient en effet que ce qu'ils cherchent est capable de les satisfaire et donnent beau à se faire battre mais dans la vérité on ne combat que l'objet qu'ils s'imaginent et non pas celui qu'ils ont en effet et qui se cache et se dérobe à leur vue dans le fond de leur cœur.

この修正では1文（«ils ne répondent pas cela, parce qu'ils se sont trompés eux-mêmes et qu'ils ont d'autres pensées.»）を追加した。

Texte 15 の後半部（第3回修正後）

ils laisseraient leurs adversaires sans repartie, mais ils ne répondent pas cela, parce qu'ils ne se connaissent pas eux-mêmes. Ils ne savent pas que ce n'est que la chasse et non pas la prise qu'ils recherchent. Ils s'imaginent que s'ils avaient obtenu cette charge ils se reposeraient ensuite avec plaisir et ne sentent pas la nature insatiable de la cupidité. Ils croient chercher sincèrement le repos, et ne cherchent en effet que l'agitation.

この修正では、ほとんど元の文章が残らないほど徹底的に変更されている。特に«se tromper», «se faire battre」といった刺激的な語彙がなくなり、パスカル本来の読者が自然とみずから納得したくなる叙述に変更されている。

個人的なメモ書きという印象を与えていた Texte 14 は、始めの書き換えで自己愛的表現を削ぎ落とされたばかりでなく、これらの幾度もの修正を経て、パスカル本来の読者がみずから同意を与えたとする文章へと変貌する。

- 6) 草稿第3ページ、第1文書の初稿で書きはじめられ、すぐに放棄された Texte 13 の最後の2行をみてもよい。

le trouble, [ce n est pas qu]ls n ayent Vn Jn instinct [qui les] qui leur] [fait connoistre que la Vraye beatitude]

ここに記されている «un instinct qui leur fait connaître que la vraie béatitude...» は明らかに Texte 16 で展開される議論の予告である。

- 7) L'Ecclésiaste montre que l'homme sans Dieu est dans l'ignorance de tout et dans un malheur inévitable. Car c'est être malheureux que de vouloir et ne pouvoir. Or il veut être heureux et assuré de quelque vérité, et cependant il ne peut ni savoir ni ne désirer point de savoir. Il ne peut même douter. (Sellier 版『パンセ』, 断章 110)
- 8) セリエ版『パンセ』より引用しておく。ただし下線筆者。

112 Orgueil. Curiosité n'est que vanité le plus souvent. On ne veut savoir que pour en parler. Autrement on ne voyagerait pas sur la mer pour ne jamais en rien dire et pour le seul plaisir de voir, sans espérance d'en jamais communiquer.

113 Description de l'homme. Dépendance, désir d'indépendance, besoins.

114 L'ennui qu'on a de quitter les occupations où l'on s'est attaché. Un homme vit avec plaisir en son ménage. Qu'il voie une femme qui lui plaise, qu'il joue cinq ou six jours avec plaisir, le voilà misérable s'il retourne à sa première occupation. Rien n'est plus ordinaire que cela.

- 9) この目次については、パスカルの自筆のものが無いので、様々な議論を呼んでいる。Couchoud が16世紀の銀行家をモデルにした版面をもとに、当時の伝票整理の仕方を示し、パスカルもそれに倣っていたことを明らかにしてくれている。すなわち、紙片に小さな穴をあけて、そこに革ひもを通し、革ひもの両側を結ぶと言う方式である。穴のあいたタイトルだけの紙片も残っているので、各束の一番上にタイトルを書いた紙片を綴じてあったという (Discours de la Condition de l'homme, p.14, Albin Michel, 1947)。

私見では、パスカル自筆の目次があったとは考えない。この目次は、パスカルが紙片を綴じて並べておいたものを、コピストがその順序をそのまま写したと考える。

- 10) セリエ版『パンセ』断章 127 にも同じことが言える。「il faut (...) montrer qu'il demeure toujours vrai que le peuple est vain, quoique ses opinions soient saines, parce qu'il n'en sent pas la vérité où elle est et que, la mettant où elle n'est pas, ses opinions sont toujours très fausses et très mal saines.»
- 11) «Ennuis」には3つの断章のみが分類され、「Opinions du peuple saines」は、そもそも存在していないので、一つも分類されていない。
- 12) 「第3文書の最終のステップは、これまで編纂されているテキストと基本的には同じものであるはず」と書いたが、これまでの編纂者は、本断章の草稿の成立の3重構造を理解していないため、多くの過ちをおかしていることを付け加えておこう。
- 13) 透かしの研究は、Pol Ernst が『パンセ』全般にわたって実施している。(Pol Ernst, *Les Pensées de Pascal. Géologie et stratigraphie*, Voltaire Foundation Universitas, 1996, Oxford.) 拙論「パスカルの『パンセ』草稿第209ページ、217ページにみられるテキストの加筆・訂正について」のなかで指摘したのもこの労作によっているが、その部分を引用しておこう。「この透かしがそれぞれの紙の出自を物語るとすれば、一つの透かしの紙が、少なくなってきたので、あらたに別の紙（もちろん透かしもかわる）を買入れたと考えられる。初稿は139, 210, 209ページに書かれており、第2稿が139, 210, 209, 217ページに、第3稿ではあらたに133ページが使われたのであるから、初稿から3稿までおとして「FNPH」の透かしを持った紙が使われていたことになる。すかしと購入時期が一致すると考えれば、初稿から第3稿まで書かれるのに、何年もの期間を考えるわけには行かない。むしろ比較的短期間で初稿から第3稿まで発展させていったと考えた方がよさそうである。」
- 14) この指摘は、筆者が師と仰ぎ筆者の『パンセ』研究を指導をいただいている Philippe Sellier 教授が、Pol Ernst の指摘を受けてさらに調べた未刊のデータによるもの。
- 15) *ibid.*, p.443 なお、CIBP の HP にて、その再現画像を見ることが出来る。

参考文献

A. Manuscrits:

1. Bibliothèque Nationale, ms. fonds fr. 9202 (Recueil original)
2. B.N., ms. fonds fr. 9203 (Première copie)
3. B.N., ms. fonds fr. 12449 (Seconde copie)

B. Fac-similés:

1. Original des Pensées de Pascal. Fac-similé du manuscrit 9202 de la B.N. Texte imprimé en regard et notes par Léon Brunschvicg, Hachette, 1905.
2. Discours de la condition de l'homme, ce qui reste du ms, en reproduction phototypique et restitution par P.-L. Couchoud, Albin Michel, 1948.
3. Original des Pensées de Pascal. Fac-similé du manuscrit 9202 de la B.N. Texte imprimé en regard et notes par Léon Brunschvicg, 復刻版, 臨川書店

C. Éditions:

- “Les Pensées de Pascal”, éd. Port-Royal, 1678, Guillaume Desprez.
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Condorcet, 1776, Londres.
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Bossut, 1779, Detune Œuvres, t. II
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Faugère, 1844, Andrieux.
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Havet, 1852, Dezobry et Magdeleine.
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Molinier, 1877-79, Alphonse Lemerre.
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Michaut, 1896, Librairie de l'Université
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Brunschvicg, 1904, Hachette.
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Chevalier, 1926, Gabalda.
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Strowski, 1931, Ollendorff
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Dedieu, 1937, Librairie l'École.

- “Les Pensées de Pascal”, éd. Tourneur, 1942, Vrin.
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Lafuma, 1951, Ed. du Luxembourg
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Chevalier, 1954, Pléiade, Gallimard
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Tourneur-Anzieu, 1960, Ed. de Cluny
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Lafuma, 1963, Seuil
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Descotes, 1973, Garnier-Flammarion
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Sellier, 1976, Mercure de France
 “Les Pensées de Pascal”, éd. Le Guern, 2000, Pléiade, Gallimard
 “Pensées opuscules et lettres”, éd. Sellier, 2010, Classiques Garnier

D. Divertissement の草稿に関する論文

Michel Le Guern, Pascal au travail, La composition du fragment sur le Divertissement, in REVUE DE L'UNIVERSITE D'OTTAWA, vol. XXXVI, no. 2, 1966

湊野正満 「Misère de l'homme」から「Divertissement」へ, 仏文研究, pp. 41-73, vol. VIII, 1979

湊野正満, パスカルの『パンセ』草稿第 209 ページ, 210 ページに見られるテキストの修正・放棄について, 京都産業大学論集. 人文科学系列. 2009, 40, p. 195-222.

湊野正満, パスカルの『パンセ』草稿第 209 ページ, 217 ページにみられるテキストの加筆・訂正について, 京都産業大学論集. 人文科学系列. 2010, 41, p. 144-180.

湊野正満, パスカルの『パンセ』草稿第 209 ページに見られる Car の放棄について, 京都産業大学論集. 人文科学系列. 2013, 46, p. 299-313.

E. 『パンセ』草稿の複読法に関するもの

Yoichi MAEDA, Le premier jet du fragment pascalien sur les deux Infinis, in Études de langue et littérature françaises, No. 4 白水社, 1964 (1965年に Société des Amis de Montaigne の Bulletin1-3月号に再掲載)

Jean Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, S.E.D.E.S, Paris, 1976

前田陽一 『パスカル「パンセ」注解』第1巻, 岩波書店, 1980

前田陽一 『パスカル「パンセ」注解』第2巻, 岩波書店, 1985

前田陽一 『パスカル「パンセ」注解』第3巻, 岩波書店, 1988

F. その他

湊野正満, 表層の《私》と深層の《私》—パスカルにおけるレトリックのもう一つの意味, 京都産業大学論集. 外国語と外国文学系列. 1986, 13, pp. 142-156.

Pol Ernst, *Les Pensées de Pascal, Géologie et stratigraphie*, Voltaire Foundation Universitas, 1996, Oxford.

Changes of titles of the fragment “Divertissement” of Pascal’s *Pensées*

Masamitsu HORINO

Abstract

The fragment of “Divertissement” of Pascal’s *Pensées* has five sheets in its autograph manuscript, of which we have discovered three layers of texts. Each layer has one writing that has its own purpose.

In the oldest layer, we found that Pascal left for himself a note of his finding a new idea concerning the mortal destiny of humans. He wrote it with vanity, because he had no intention to show it to anyone else, it was only for himself.

In the second, we found Pascal remodelled his first writing into another in order to incorporate the former into his planning Christian apologetics. This second writing has the title of «Misère de l’homme», the same as the third chapter of his future apologetics.

In the third layer, we found that he made his second into the third writing with many ideas of “divertissement”, create a new chapter named «Divertissement» and transfer it from the 3rd chapter to the 8th along with other fragments concerning this ideas.

In this article, we argue the change of these two titles with the three writings found on the same five sheets of autograph manuscript mounted on the album “Recueil Original des *Pensées* de Pascal”.

Keywords: *Pensées* de Pascal, «Divertissement», morphogenesis of contents, changes of titles, autograph manuscript